

安曇人

安曇誕生の系譜を探る会

- | | | |
|-------|-----------------|------|
| 1 | 新しい情報も上手く使いながら | 百瀬新治 |
| 2~3 | 安曇野の地形と村落立地 | 矢花和成 |
| 4~9 | 穂高神社をめぐる呪的世界の展開 | 刈間健志 |
| 10~12 | 安曇平の古代から中世の遺跡立地 | 寺島俊郎 |

発行責任者 会長 百瀬新治 事務局長 川崎克之
編集委員長 加蔵友美 企画運営委員長 古川幸男

〒399-7102 安曇野市明科中川手1177-3 ☎090-5779-5058



写真 川崎克之

新しい情報も上手く使いながら

会長 百瀬 新治

昨年末のこと、NHKの番組を見て少なからぬ衝撃を受けた。現在の日本人がいつどのような経緯をもって誕生したかを最新の遺伝子（ゲノム）解析で明らかにしようとする、本格的なドキュメンタリー番組だった。

日本人の起源については、縄文時代までに日本列島全体に人間が定着し、弥生時代になり新たな集団が移入同化したことで、現代の日本社会が形成されてきたとする考えが定説である。私もその歴史観を前提として、発掘調査による考古学的な追究をしてきた。縄文時代に南方から移動してきた縄文人の社会に、新たな文化を携えた弥生人が移入混血して、現在の日本人と日本文化が出来上がってきたと理解している。

先述の番組では、この定説とは全く異なる知見を最新の科学分析を裏付けとして提起していた。約8千年前の縄文人骨とアジア諸国の現代人の骨をゲノム解析した結果、タイの山岳地帯に住む少数民族と酷似していたのだ。おそらくは同一の集団だったものが、一方はタイに留まり他方は北上して日本列島に移住したのだ。日本人の起源が具体的な資料で明らかになったと報じられた。

もう一つインパクトのある分析結果が示された。日本

人の成立に、縄文人の遺伝的形質に弥生人の遺伝子が加わったことは確かだが、それ以上に現代日本人の形成に大きく関わったのは、古墳時代になりアジア各地から渡来した集団の遺伝子であるというのだ。日本国が成立する時期でもある4世紀から、多くの集団が多数で渡来し列島の人と混血した結果が、現代日本人となったという結論だった。

私は昨年8月の当会歴史サロンで、この古墳時代を安曇郡成立期として、安曇族との関係も含め考古学的所見で考えを発表しただけに、戸惑いは大きかった。しかしすぐに思い返した。戦前まで皇紀2600年とされた日本の歴史を、1万年まで遡る歴史があると覆したのは旧石器時代の石器を発見した考古学なのだ！歴史で定説や常識とされるものは、それを打ち破る新たな資料発見や論考で塗り替えられていく。むしろ、そこに焦点を当て調査し研究することが、使命であり楽しみでもあるのだ。

本年の新しい試みとして、この最新情報をもとに、『安曇族をもう一度見返す』機会を本会活動として提案したいと考えている。

ほぼ一致する。さらに、南米チリ沖の海嶺で生まれた海洋プレートの「太平洋プレート」が北米プレートの下に強い勢いで沈み込み、松本盆地など本州中部を東西に圧縮する。そのため、活発な南北方向の地殻運動により高峻な山脈列と相対的に沈下した盆地列が形成された。安曇野の飛驒山脈、松本盆地、筑摩山地の原形はこのような過程の中で約70万年前に誕生したのである。また、同じ海洋プレートである「フィリピン海プレート」が南東から本州中部の深部に潜り込み、マントルを融解して大量のマグマを発生・上昇させ、約160～140万年前に穂高岳や爺が岳の巨大カルデラを形成し、現在の御嶽山、乗鞍岳、焼岳をも誕生させた。

これらのプレートの衝突により、およそ300万年前から日本列島の隆起が顕著となり、糸魚川-静岡構造線の動きが活発化して古飛驒山脈が隆起を開始した。約100万年前頃にはフォッサマグナ最後の海が日本海から明科付近にまで残存し、飛驒山脈からの大量の礫がそれを埋めて大峰層が形成され、長野にかけて大平原が広がっていた。約70万年前頃から盆地両側の断層を境に、飛驒山脈の隆起速度が速まり、東の筑摩山地も隆起する中で、両者の間が相対的に沈下して松本盆地の形成が始まった。約15万年前からこの地域全体が隆起する中で、飛驒山脈がさらに隆起して高峻な山脈となる。河川の侵食が激しくなり、盆地に厚く砂礫が堆積して山麓に大規模な複合扇状地が形成された。東の筑摩山地も緩やかに隆起を続け、蛇行していた犀川が峡谷を形成、相対的に沈下した松本盆地と飛驒山脈との標高差が拡大した。

以上のように、安曇野は隣接する4枚のプレートが作用しあう、日本や世界でも非常に稀な地域なのである。

3. 安曇野の扇状地

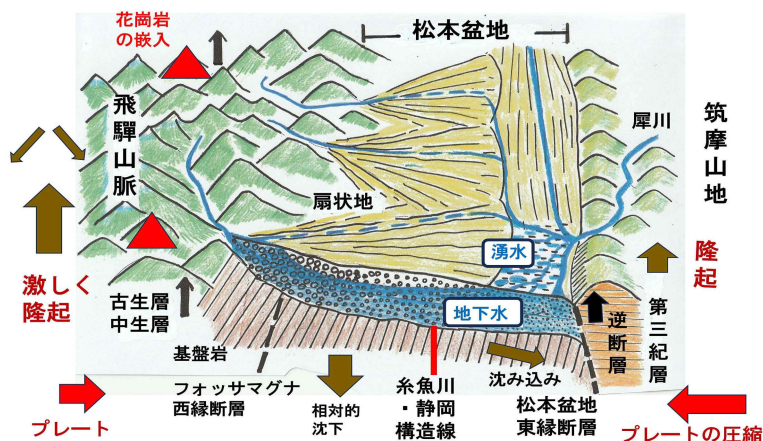
扇状地は山麓の谷口に形成された扇形・緩傾斜の地形で、洪水時に運搬された大量の砂礫が長期間に堆積して形成された。扇状地は上流から、谷口の「扇頂」、中央部「扇央」、末端部の「扇端」から構成され、透水性が大きい砂礫からなる扇央部では河川水は地下に浸透して伏流し、扇端部で湧水となって地表に現れる。そのため、扇央部を流れる河川は洪水時のみ流れ、普段は水流が見られない「水無川」をなす。穂高を流れる烏川がその例である。

松本盆地は、奈良井川・梓川・烏川・中房川・高瀬川などが形成した扇状地が接合した複合扇状地から構成されている。特に安曇野南部には、島々付近を扇頂とし、松本市旧梓川村から島内、安曇野市三郷、高家、豊科市街地から重柳付近に至る大規模な梓川扇状地が広がる。

また、旧三郷村西部には黒沢川扇状地が、旧堀金村から旧穂高町にかけては烏川扇状地が広がる。さらに、有

松本盆地の構造(イメージ図)

【作成 矢花】



明には中房川扇状地が広がり、松本盆地北部の大明町、松川、池田から明科・押野にかけては大規模な高瀬川扇状地が北から南に傾斜しながら展開する。

山麓の谷口に位置する扇頂部は生活基盤であった水利と狩猟・採集条件に恵まれ、縄文時代以降、牧、田多井、小倉などの村落が立地した。また、矢原など平坦地に接し湧水が豊富な扇端部には水田耕作が始まった弥生時代以降、大規模な村落が立地した。扇状地の大半を占める扇央部は地下水面が深い乏水地域であるため開発が遅れ、森林や畑が広がっていたが、中世以降の堰(せぎ)の開削によって徐々に水田化が進展し、村落が増加した。

これらの扇状地のうち、特に梓川扇状地や烏川扇状地はその後の地盤の隆起もしくは海面の低下による河川の侵食力の増大による段丘化が進展し、その一部には乗鞍岳などの火山灰起源のローム層が載る。

次稿では安曇野の段丘地形の概略に触れ、さらに扇状地や河岸段丘などの地形と土地利用及び集落立地との関連性について、幾つかの事例をあげながら考察を試みたい。

【参考文献】

フォッサマグナミュージアム編『フォッサマグナって何だろう』(2008)、藤岡換太郎『フォッサマグナー日本列島を分断する巨大地溝の正体』講談社(2018)、豊科町誌編纂委員会編『豊科町誌自然編』(1995)、『豊科町誌歴史編・民俗編・水利編』(1995)、島内地区歴史文化財調査委員会編『島内の歴史と文化遺産』(2020)、原山智、山本明『「槍・穂高」名峰誕生のミステリー』山と溪谷社(2020)

【図版】

図1. (フォッサマグナの図)

フォッサマグナミュージアム編『フォッサマグナって何だろう』(2008) より引用

図2 (日本列島のプレートの図)

『信濃毎日新聞』2017年6月30日 より引用

図3 (松本盆地の構造の図) 矢花作成

穂高神社をめぐる呪的世界の展開

刈間 健志

三郷の住吉神社が穂高神社の真南に位置していることはよく知られている。平安時代後期、住吉庄はすでに成立していたと考えられていることから、住吉神社は少なくとも平安後期には現在の位置に鎮座していたことになる。両社が正確な南北の位置に配されたのも古代に遡るのであろうか。よく調べてみると穂高神社を中心として東西南北、或いは十二方位のいくつかの特異な並びの神社・遺跡・霊峰が存在することに気づかされる。偶然と呼ぶにはあまりに出来すぎているため、そこに施された意図を感じざるを得なくなったのである。その一つ一つを見ていこう。

穂高神社の南方向から180度転回して今度は北に目を向けると、穂高神社を通る子午線は青木花見を抜け、池田町十日市場の川会神社に至る。さらに北へ遡ると大町市宮本、仁科神明宮に突き当たる。川会神社は現在十日市場の「島の宮」の社地に鎮座しているが、長い間その位置は一定せず、明科周辺を漂泊していたようである。社地が現在地に落ち着いたのは明治以降のことで、もともとの社地がどこにあったのかははっきりしたことはわかっていないが、伝えによると池田町内鎌地区、今の「安曇養護学校」の所在地周辺にあったという。「島の宮」の東側、一本の長い道が北にまっすぐ延びている。これが延喜式内社を象徴する長い参道であったと言われている。

子午線上を南から住吉神社、穂高神社、川会神社、仁科神明宮と四つの神社を並べてみると、一直線に、また何故かそれぞれほぼ等距離に配置されているのがわかる。

次に東西はどうであろうか。穂高神社から東を望めば一目瞭然、真東の位置に「犀の宮」そして長峰山が聳えて春分秋分の朝日が山頂付近から昇ってくる。「犀の宮」が住吉神社や穂高神社のように古代から現在地に鎮座していた確証はない。しかし穂高神社の真東という位置、長峰山の山際という絶妙な位置関係も何かしら意図的なものを感じさせる。長峰山に関しては安曇野を臨む代表的な里山であるとともに縄文・弥生時代から人が住み、遺跡も発掘されている最も身近な霊峰といってもよいであろう。

続いて西側はどうであろうか。穂高神社の西には安曇野を象徴する常念岳が聳え、春分秋分の夕日を受け止める。穂高神社に崇高な雰囲気をもたらす霊峰といってもいいだろう。常念岳の裾野、古代道でもある現在の山麓線と卯西(東西)線が交わるあたりにその存在が想定される神社・寺院・遺跡などは実際存在しないが、少しだけ南に下ると栗尾山満願寺がある。古くからあたり一帯を領して修験霊場の中心であったと聞く。穂高神社から見て真西に位置する地点にもかつては何か特徴的な建築物が存在していたのかもしれない。

さて、東より長峰山山頂、犀の宮、穂高神社、満願寺の北辺、浅川山、常念岳を線で結んで見ると卯西(東西)線とほぼ一致しており、穂高神社と長峰山の距離は穂高神社-満願寺間の距離とほぼ一致している。さらにこの距離は穂高神社と川会神社との距離にほぼ等しくなっている(住吉神社は少しだけ遠い)。イメージ的には穂高神社を中心を描いた円と穂高神社を東西、南北に横切る直線を描いたとき、その交点がそれぞれ、川会神社、長峰山、満願寺北辺、(住吉神社の少し北)と一致しているのである。よく出来た配置である。

〈レイラインと太陽信仰〉

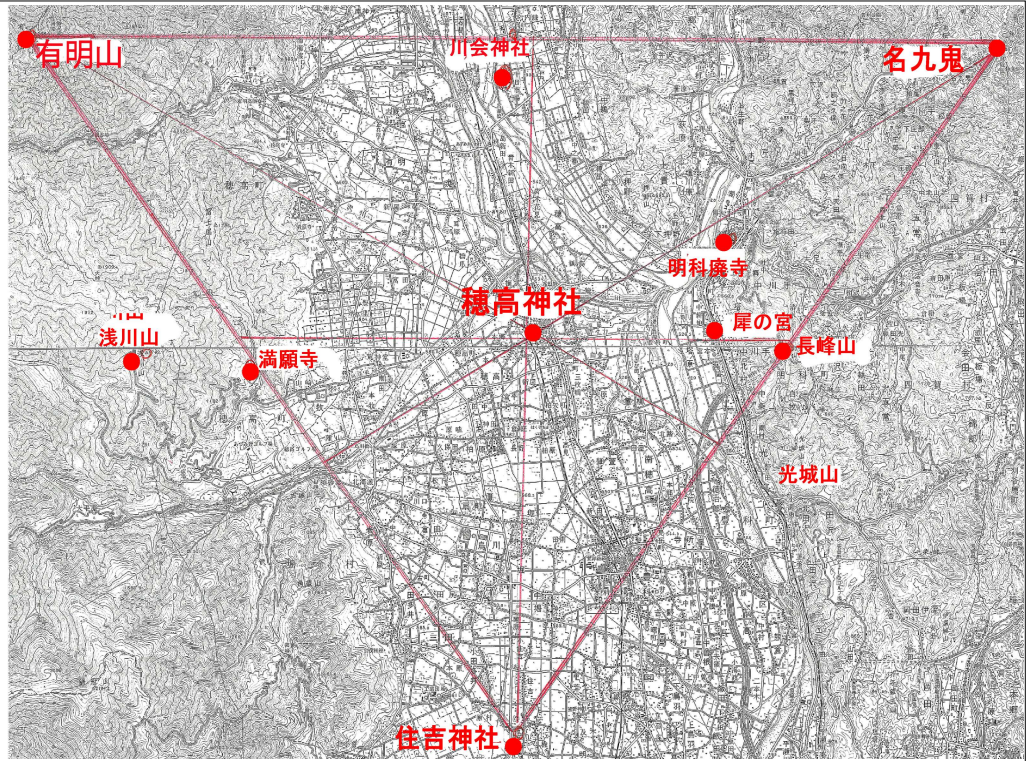
1921年イギリスのアマチュア考古学者アルフレッド・ワトキンスによって「レイライン」説が提唱された。ワトキンスは、古代イギリスの重要な遺跡位置を地図上で結んでみると直線的に並んでいることを発見した。このことから古代遺跡の建築場所は古代人にとって特別な意味のある場所ではないかと考えられるようになった。

ワトキンスのレイラインは単純な発想のもとに生まれたものだったが、日本では「太陽信仰」とのかかわりで「太陽の通り道」として注目を集めるようになった。1970年代、古代史研究家の小川光三氏の提唱する「太陽の道」(北緯34度32分の線)は、近畿地方における重要な古代遺跡や寺社の地図上の位置を一本の線(春分秋分の太陽の道)が貫いているというものだった。誤差の多かった小川説の補強を行った水谷慶一氏によると、東より「伊勢斎宮跡」「室生寺」「長谷寺」「檜原神社」「箸墓古墳」「大阪山」「大鳥神社」。北緯34度32分の緯度線上に居並ぶ各ポイントはアマテラスに関係した寺社や遺跡であり、春分秋分の明け方、真東に位置する伊勢方向から昇る太陽を拝むかたちになるという。そののち春分秋分の太陽レイラインは富士山や出雲大社を通過する線など代表的なものだけでも10本以上見つかり、太陽信仰や神話関連のレイラインの他農業カレンダーとしても利用されたのであろう。

素朴な太陽信仰の片鱗は縄文遺跡からも発見されている。各地に存在する環状列石の柱や石柱の隙間が春分秋分、或いは冬至夏至の太陽が昇降する方角を指し示しているというもので、安曇野に近いところでは岐阜県の金山巨石群や大町市上原遺跡の列石などがある。地図を使って調査したところでは穂高神社の頭上を通過する冬至や夏至のレイラインも存在していそうである。ちなみに冬至や夏至のレイラインとは、東西を通過する卯西線から南北に30度の傾きを伴った直線のことである。

まず夏至の太陽が昇る東北東30度の線上には明科廃寺跡が、さらに名九鬼地区を通過して西条方面に抜けて

いく。振り返って冬至の太陽が沈む西南西30度の方角には須砂渡の山神社、そして明神池の穂高神社奥社に至る。明科廃寺・穂高神社・山神社・奥社へと続く夏至(日出)→冬至(日没)のレイラインは穂高神社にとってすこぶる重要なレイラインに思える。ただ山神社や穂高神社奥社は比較的新しい時代の創建と考えられるため、古代から存在した明科廃寺-穂高神社のレイラインをさらに西南西方向に延長してレイラインの日没側を完成させた様子がかがえる。次に冬至の太陽が昇る東南東30度の方角にはぴったりではないものの光城山があって、



正月の太陽が昇るご来光の方角となっている。神道において重要な方角である。また、夏至の太陽が沈む西北西30度の方角にはぴったりと有明山が聳えたっている。人工物は後から修正したり追加建造することが可能だが、自然物は修正が効かないため、山の山頂をレイラインに利用する際は、山の位置を目標に測量を繰り返し、神社建設に適当な場所を確保しなくてはならない。常念岳・長峰山・有明山、安曇野を代表する三霊峰を春分・秋分、夏至、冬至、三つのレイラインに取り込もうとした場合、意図せず気ままに建設位置を決定することは不可能である。偶然の一致とするには無理があるだろう。

〈レイラインと陰陽五行思想〉

関西の古墳、寺社、遺跡、霊峰の位置関係に一定の規則性があることを見出し、南南東(北北西)30度のレイラインを提唱したアマチュア考古学者大河内俊光氏によると、古代から近世に至る歴史的にもかなりの長期に渡ってこうした傾向が続いていたという。

現代においても家の建築時、風水占いをを行い、玄関位置や鬼門・裏鬼門を定める因習が残っているが、その大元を古代に訪ねれば陰陽道や道教呪術に行きつく。大河内氏は、古墳と霊山との間に南南東(北北西)30度の関係が見られることから、易や道教呪術が日本に流入した時期を少なくとも弥生晩期と見ている。(例えば、4c前期の櫛山古墳---三輪山、3c中期~後期の箸墓古墳---熊が岳など古墳時代前期すでに南南東30度の関係が見られる)

南南東(北北西)30度のレイラインが意味するところは何か。大河内氏によるとその答えは「漢易」と称される漢代の易学の中にある「十二消息の卦」に由来しているという。「十二消息の卦を方位に当てはめてみた場合、

六画とも陽の卦になる方角が南南東30度の巳の方角になり『乾为天』の卦となる。北北西30度の亥の方角は六画とも陰の卦『坤为地』となる。」「易経において『乾为天』は天道を統御する根源であり、『坤为地』は万物生成の源である。天地を模範として作られた『乾』と『坤』が天地に代わって万物を生成し天を統べる。」南南東から北北西の線上にかけて古墳、都城、神社、寺院を築造した大きな意味はここにあるのだという。要するに巳や亥の方角は古墳時代以来の恵方なのである。

大河内氏が十二消息の卦の内『乾为天』と『坤为地』のみに注目したのは古墳と山頂との位置関係に相関を認めたからであるが、十二消息の卦はその名のとおり十二種類あって、それぞれが十二の方位と対応している。漢易の時代、民間にはすでに五行説や干支と絡む方位観が流布し、十二消息の方位は五行や干支と習合し、一部は弥生時代の日本にも流入した可能性がある。南南東(北北西)30度線(干支でいう巳亥線)の他、春分秋分夏至冬至の太陽にかかわるレイライン(寅申線・卯酉線・辰戌線)も干支や五行説の方位観に取り込まれる形で新たな意味を与えられたであろう。

ただ日本が正式に易や干支暦を受け入れたのは欽明天皇の十五年(554年)二月のこととされている。この時陰陽五行思想も伝来したとみられる。日本書紀に「(百濟は)勅により易博士施徳王道良・暦博士固徳王保孫・・・(中略)・・・をたてまつった。」とあることから仏教公伝後まもなくして易や暦も日本にもたらされたことがわかる。この頃から公にも呪術的な筮法、陰陽五行思想が政治的意志決定に深く関与するようになってゆく。その表れの一つが都城建設である。易や暦、五行の知識は平城京建都の際も厳密に活かされている。宮殿や行政施設、寺院、城門の位置、都城周囲の地形(四神相応)など方位

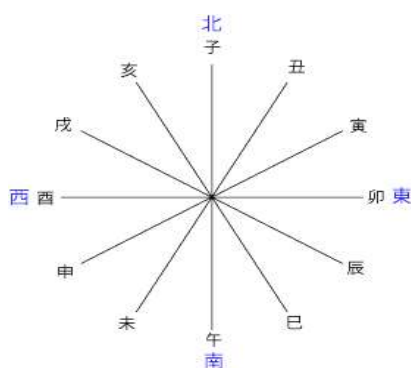
に関してのみならず、建都にかかわるあらゆる決断に吉凶を占う呪術が関与した様子が見られる。

『続日本紀』和銅元年(708年)二月十五日「王公大臣は皆いう。『昔から近頃に至るまで太陽や星を観測して、東西南北を確かめ、宮室の基礎を定め、世を占い地相をみて、皇帝の都を建てている。天子の証である鼎を安定させる基礎は、永く固く無窮で、天子の業もここに定まるであろう。』と」「(朕は)安んじてその久安の住居を遷そう。正に今平城の地は青龍・朱雀・白虎・玄武の四つの動物が陰陽の吉相に配され、三つの山が鎮護の働きをなし、亀甲や筮竹による占いにもなっている。ここに都邑を建てるべきである。」

中国の都を模して建設された平城京は易や亀甲占い、陰陽道などによってその位置が厳密に定められたと思われる。日本初の条坊都城、藤原京建設もまた同様に進められたのではなかろうか。大河内氏は藤原宮跡から南南東30度方向に大宮寺跡(大宮大寺か?)、飛鳥座神社、岡寺、宮瀧遺跡の存在することを指摘する。大和岩雄氏も藤原京と大和三山の呪術的な位置関係が都の守護に結びついていると説く。要約すると。「藤原宮大極殿から三輪山・香具山・畝傍山・耳成山山頂が寅・辰・申・子方位に一致する。寅・卯・辰は(五行の)木気。木気の寅・辰方位に三輪山・香具山、卯方向に伊勢神宮。寅と申は子と午とともに陰陽五行の基本線である。子午線の軸は子が耳成山、午は天武・持統陵。寅申軸は三輪山と畝傍山。寅方位の三輪山に夏至の朝日が昇り、(冬至の)夕日は畝傍山の申方向に落ちる。冬至の朝日は香具山の辰方位から昇る。」

冬至夏至の太陽の昇降に関わる方位は干支十二方位のうち寅・辰・申・戌にそのまま読み替えることができる(多少のズレはある)。五行説における太陽の動きは木気から金気への移動ととらえられ、時間や歴史の実体は五行の展開へと観念化される。年中行事、冠婚葬祭、生老病死この世のすべてが陰陽五行や占いによって説明される古代社会にあってレイラインの指し示す意味合いは実に重大であったと考えられる。

〈十二方位のレイライン〉



干支の十二方位を使ってできる6本のレイラインのうち、東西南北を示す2本と太陽の道を示す2本は特に有意なレイラインである。すでに述べたが、穂高神社

についても同様のことが確かめられた。では他の2本、巳亥線と丑未線にはどんな意味があるのだろうか。

実のところ穂高神社周辺で巳亥線・丑未線上に目立った目標物(寺社・遺跡・霊峰など)は存在しない。巳の方角は大河内氏の指摘する南南東30度の恵方になる。旧安曇郡域を抜けてさらに直線を延長すると、松本城をかすめて弘法山古墳に至る。この先は埴原神社・牛伏寺・高ボッチ山頂・諏訪大社下社の頭上を通過し、富士山に向かうことになるのだが、そこまで壮大なレイラインに果たして有意性はあるのだろうか。はたまた穂高神社の建設は国家プロジェクトの一部であったのか。

ところでこれはレイラインと関係のない事象かと思われるが、巳亥線・丑未線をつづきに見ていくと泉小太郎伝説や八面大王伝説にまつわる地名が集中的に出現することに気づかされる。偶然であったとしても興味深い事実である。

〈穂高神社をめぐる結界〉

攝津の住吉神社では古くから「埴採の神事」が行われてきた。「二月の祈年祭、十一月の新嘗祭の十日前、神官が「埴使」と称して大和国高市郡雲名梯神社で装束を改め、畝傍山の山口神社に至る。往古より定められた場所を埴をとり埴管に収めて住吉神社に帰り、埴司に天ノ平瓮を作らせ祭器とする。かつては畝傍山ではなく天ノ香山で「埴土」を採ったと伝えられている」という。

「住吉大社神代記」に住吉大神(筒之男三神)から神功皇后へ同様の詔が下される場面があるが、それは神武天皇が紀伊半島を迂回して大和に攻め入ろうとしたときの逸話に酷似している。神武が大和の磐余邑に兄磯城を討たんとするとき、夢に天神のお告げを受ける。「天ノ香山の杜の朱土をとり、平瓮・巖瓮をつくって天神地祇をまつり巖の呪詛(かじり)をなせ。そうすれば賊おのづから平ぐだろう」(日本書紀)。カジリとは「神に祈って、人を詛う」ことであり、祭器としての朱土はそのものが供物でもある。

播磨国風土記に神功皇后が征韓に臨んだ折の記述がある。「此に赤土を出し賜いき。其の土を天ノ逆鉾に塗りて神舟の艫舳に建て、又御舟の裳と御軍の着衣を染め、・・・是の如くして新羅を平伏す」神功皇后の新羅征討に際して、船舶のみならず着衣にまで朱が塗られていたことがわかる。海部郷の漁師たちが「赤禪をするとフカに食われない」といった伝承を持っていること、倭人たちが朱丹を体に塗る風習があったこと(魏志倭人伝)などを併せて考えれば、呪詛の手段として始まった因習が徐々に魔除けや結界としての役割を強めていったことがうかがえる。そしてこの安曇野でも埴土に象徴される結界が施された形跡がある。

全国の住吉神社所在地で多く使用される地名がある。それはナガやナカである。「日本書紀」神功皇后記に「表筒男・中筒男・底筒男の三神が教えていわれるのに、『わが和魂を大津の淳名倉の長峽にいさしむべきである。

そうすれば往来する船を見守ることもできる』と。」とある。筒之男三神の坐す社、すなわち住吉大社の所在地は正に長峡(ナガオ)である。(「大津の淳名倉の長峡」を現在の神戸市東灘区の本住吉神社とする説もある。)一方、イザナギのミソギで筒之男三神が生まれたとの伝承を持つ筑前博多の那珂(ナカ)や名柄(ナガラ)川河口付近にはそれぞれ住吉神社が鎮座している。その他、兵庫県明石市中尾、香川県さぬき市長尾、京都府福知山市長尾、三重県熊野市紀和町長尾、長野県安曇野市三郷長尾など住吉神社の所在地周辺にはナガ・ナカ地籍が散見される。兵庫県北区長尾町の長尾神社のように住吉社を称していなくても「住吉大神」を祀っている例も見受けられる。

富来隆氏によると、ナガやナカの地籍は蛇神信仰や赤土による呪詛の風習と関係が深いという。住吉神社の「埴採の神事」(忍熊王に対する神功皇后のカジリ)も神武による天ノ香山での埴土の採集も戦勝祈願の呪詛(魔除け、結界)のためであった。ナガやナカに加え、赤土に関わる地名もまた結界の役割を担わされてきたのではなかろうか。

穂高神社の東西南北にある長峰山、満願寺、住吉神社、川会神社がほぼ等距離で穂高神社をとり囲んでいる事を前述したが、川会神社の近くに「中(ナカ)の郷」があることを加えて鑑みれば、穂高神社がナガやナカ地名に囲繞された呪術的にきわめて特徴的な位置に配されていることが理解されよう。加えて穂高神社の北方、仁科神明宮は丹生子(にゅうのみ)地籍に近接しており、水銀朱や赤土を意味する地名と無関係ではない。穂高神社の北東側を広く占めている「明科」も元は「赤科」であり、赤土を意味する地名だったのかもしれない。ナガやナカ、赤土地名に取り囲まれている穂高神社。これも出来すぎた偶然なのだろうか。

<鬼地名と結界>

穂高神社の寅方向に「名九鬼」という地名がある。明科廃寺跡への方角とほぼ一致している。夏至の太陽が昇る寅方位は恵方ということである。(名九鬼地区の北辺は鬼門とされる丑寅方向に近い)「名九鬼」は「紅葉鬼人伝説」で親しまれている地域だが、旧篠ノ井線のトンネルが地区を通っていた関係で、近年は廃線を歩くトレッキングコースとして整備が進んでいる。また、安曇野の代表的な道祖神として名高い「双体接吻道祖神」もこの地区の近くにある。鬼地名を恵方に置いて結界(魔除け)化するといった発想は鬼門思想より古い時代のものであろう。密教における護法童子、陰陽道における式神のように、鬼をもって鬼を封じようとする発想は、朱のマジック(呪詛)によって敵の攻撃や呪詛を封じこめる結界思想と通底している。

こうした鬼地名の例は近畿でも確認されている。三重県尾鷲市や熊野市には鬼地名が多数密集した地域があり、

古の都藤原京や平城京の結界の役割を果たしたと見られる。尾鷲・熊野周辺には九鬼・七鬼の滝・八鬼山、鬼が城など鬼地名の他、かつて鬼地名であった市木(一鬼)、木本(鬼本)、二木島(二鬼島)、三木浦(三鬼浦)、三木里(三鬼里)、遊木(遊鬼)などがある。日本書紀に神武東征の折、熊野に迂回して大和に攻め入ったことが記されているように、大和地方は開発の進んだ西や北は守りも堅固だが、山がちな南方の守りは脆弱であった。それ故、都の守りとして南の熊野方面に鬼地名を置いて結界を設けたと考えられている。平城京・藤原京から南南東30度方向に当たる鬼地名密集地域は大河内氏の唱える古代の恵方でもある。

<天武天皇の行宮計画>

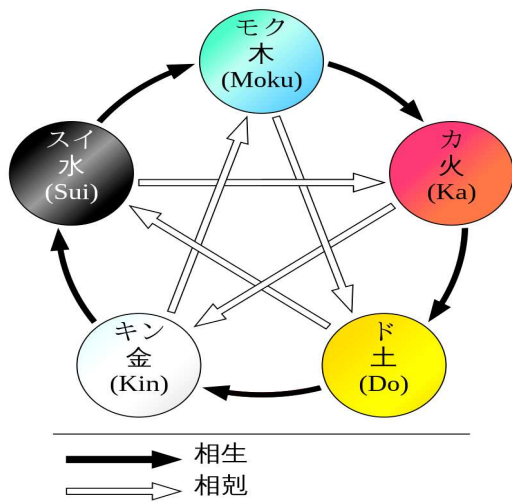
以上のように、穂高神社周辺には呪術による様々な防衛システムが施されている。時代の古いものから新しいものまで、何百年もかけて徐々に完成されたように思われる。単なる偶然や主観的な理屈だと言われればそれまでだが、古代の都城建設において呪術が施されたのは確かである。しかし穂高神社のような一地方の神社にここまで重層的な施術がなされたのはなぜなのか、あまりにも念を入れすぎているのではなかろうか。方位だけでなく距離まで正確に計測されている。それはまるで都城の建設計画を彷彿とさせるレベルのものである。東に犀川(青龍)、西に山麓道(白虎)、北に押野山(玄武)、南に沃野(朱雀)という四神相応に適った地形もまた穂高神社が都城の中心に置かれたような想像を膨らませる。実際この場所に何か重要な施設が建設されようとしていたのではなかろうか。果たしてそれは何だったのか。

安曇野には「皇極の太子が郡宮として穂高神社を創建した」という伝承があり、天武天皇の信濃行宮計画も晩年実行にうつされたことがわかっている。大和政権が本気で動き出したとなれば、政権中枢にいた貴族や官僚もやむなく動員に従ったはずである。御厨の形成・管理を担った安曇氏も当然の如く一族を伴って信濃に下向を果たしたであろう。

皇極の太子は本当に安曇野へやって来たのか。天武の行宮計画の行き先はどこであったのか。そしてその目的は何であったのか。安曇郡との関わりはあったのか。物的証拠は一つもない。しかし天武天皇は陰陽道や天文・遁甲に通じ、陪都や行宮の造営計画にも呪術を施そうとした形跡が残されている。

「(天武天皇十三年春一月)二十八日、浄広肆広瀬王・小錦中大伴連安麻呂および判官・録事・陰陽師・工匠らを近畿に遣わして都を造るのに適当な場所を視察し占わせた。この日三野王・小錦下采女臣筑羅らを信濃に遣わして、地形を視察させられた。この地に都を造ろうとされるのであろうか」(日本書紀)。

三野王による地形調査が行宮造営の事前調査であったことは明らかだが、同日陪都造営の調査のため近畿のい



づれかに赴いた広瀬王が陰陽師を伴い、行先で占いや呪術を施したのがうかがわれることから、信濃への三野王の視察にも陰陽師が伴い、地形や方位の吉凶

を占っていたことが推測される。陰陽師の占う対象は、天文(太陽信仰)・結界の他五行に関わる事項、地勢・風水(四神相応)である。そして天武天皇の背負う五行の徳に適う土地であるのか詳しく調査されたであろう。

<火徳の王、天武>

吉野裕子氏、大和岩雄氏によると天武天皇は陰陽五行説における火徳の王であるという。

陰陽五行説とは、自然界のあらゆる物事の発生・変化・発展は陰と陽の相互作用から生じるとする陰陽思想と、季節が春夏秋冬とうつろうように人も社会も生旺老死を輪廻転生し、その本質は五元素(木火土金水)の相互作用であるとする五行思想の習合した信仰形態である。古代中国ではさらに易経や干支との結びつきを深め、古代日本においては太陽信仰や神社信仰・修験道などとも結びつき陰陽道として体系化された。

木火土金水の五元素は宇宙に遍く存在し、森羅万象に入り込んで五つのシンボルとして出現する。例えば、木火土金水に対応する季節は春・夏・土用・秋・冬、方角は東・南・中央・西・北、色は青・赤・黄・白・黒、五獣は青龍・朱雀・黄龍や麒麟・白虎・玄武といったようにこの世のすべてが五元素に配分される。

五元素の相互作用を五行と言ひ、五行は基本、相生(順送りに相手を生み出す陽の関係)と相剋(相手を討ち滅ぼしていく陰の関係)によって循環する。政権や政治体制もまた五行の理によって循環するのである。吉野氏によると、孝徳天皇、天智天皇、天武天皇はそれぞれ五元素の水・木・火の政権に対応し相生(水生木、木生火)によって交代したのだという。

天武天皇が火徳の王である根拠は以下の通りである。

- ① 天皇は十五年(868年)九月九日の重陽に崩御している。干支に直すと「丙戌年戌月丙午日」で丙は五行の火気。午は五行の火に配される。(吉野氏は天武の火徳に合わせて崩御日が決められ「書紀」に記された、という。)
- ② 崩御の四十九日前、「朱鳥(あかみどり)」に改元されている。この日は七月二十日で「戊午」である。午は

火、朱は赤で火を表す。五獣で朱雀は火に当たるため「朱鳥」と名付けたのではないか。

- ③ 天武・持統の合葬陵は藤原宮大極殿の南(午)に位置し、文武陵も南に位置する。
- ④ 天武が出家し吉野に入ったの日も、壬申の乱挙兵日も壬午の日。
- ⑤ 天武元年(673年)大海人皇子の軍は「赤色を以て衣の上に巻く」(日本書紀)とあり、「古事記」の序においては「絳旗兵を輝して凶徒瓦のごと解けつ」と天皇の功を讃えた。赤色の軍衣、赤旗が大海人軍を表示している。
- ⑥ 壬申の乱の折、近江(大友)軍の将は自軍の将卒に「金」の合言葉を使わせ、敵味方を判別したと「日本書紀」は記す。火剋金の相剋の理によって火が金を征したことを表すアナロジーだが、戦闘の記録は勝者によって粉飾されたものと吉野氏は推測する。

藤原京は持統天皇が完成させた都ではあるが、計画段階での夫天武の着想が数多く具現化されていると思われる。もし天武が火徳の天子であったと持統が自認しているとするれば、大極殿の南(午)に天武・持統の陵が置かれたことも、相生の理(木生火)によって火を生む木気方向(寅・卯・辰)に三輪山・伊勢神宮・天ノ香山が配されたことも、一応納得はできる。都城周辺の方位観に火徳の反映を見るからだ。

しかし、これらが天武の火徳天子たる所以なのか、或いは都城建設に関わる時代の意識や精神性の反映なのか今のところ判断はできない。ただ、実のところ穂高神社周辺にも同様の(火徳の?)方位観を見出すことはできるのである。藤原京では木気(寅・卯・辰)が特に強調されているように思われるが、穂高神社の寅・卯・辰の方角にもそれぞれ明科廃寺跡・長峰山(犀の宮)・光城山があつて重要なポイントを占めている。

明科廃寺は信濃における最古級の伽藍寺院である。人口もまばらな未開拓の安曇野に突如現れた文明の装置は、地域豪族の目を驚かすのに十分効果があつたはずである。どう考えても場違いな建築物の出現に大和国家の影を受け取らざるを得なかつたであろう。

犀の宮神社の祭りの幟は今でも真紅の大幟である。昔は明科から田沢にかけて神社の幟は皆朱に彩られていたのではなからうか。赤の幟、赤旗といえは壬申の乱で大海人軍の掲げた旗色を彷彿とさせる。長峰山の「ナガ」が赤土地名である上、火徳の赤が加わると赤のダブルイメージとなる。

五行	木	火	土	金	水
五色	青(緑)	紅	黄	白	玄(黒)
五方	東	南	中	西	北
五時	春	夏	土用	秋	冬
五獣	青龍	朱雀	麒麟(黄竜)	白虎	玄武
五臓	肝	心	脾	肺	腎
五腑	胆	小腸(三焦)	胃	大腸	膀胱
五味	酸	苦	甘	辛	鹹(塩)
五虫	鱗(魚/爬虫類)	羽(鳥)	裸(人)	毛(獣)	介(亀/甲殻/貝類)
五徳	仁	礼	信	義	智

藤原京の南(午)に天武・持統陵が置かれたように穂高神社の南(午・朱雀)には赤土イメージの住吉神社が配置されている。南は三合火局の旺気であり、特に重要な方位である。三合というのは五行思想における中心的な教理であり、すべての生物・万象には榮枯盛衰があつて、生・旺・墓の三態を具備しなければ万物の生々流転・輪廻転生は不完全となる。三合会局によって五行の力は強化されるという。具体的には五元素それぞれに五通りの組み合わせがあり、三合火局の組み合わせは生気の寅、旺気の午、墓気の戌である。藤原京の墓気については吉野氏も大和氏も言及していない。しかし戌の方角に「曾我坐曾我都比古神社」があることは見逃せない。曾我坐曾我都比古神社は持統天皇自ら蘇我氏の滅亡を哀れみ創建されたという縁起をもっている。死と消滅が輪廻を引き寄せるのだ。

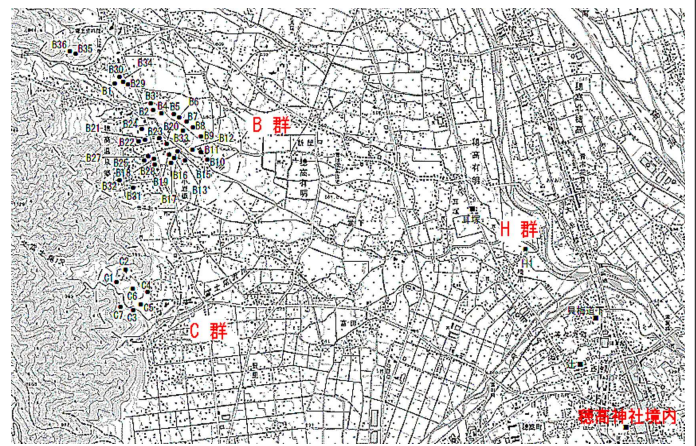
穂高神社の戌の方角には富士尾山頂、そして有明山がある。常念や大天井、槍、燕が飛驒山脈の尾根の一部であるのに対し、有明山は前山であり安曇野に裾野を開く神奈備山である。その裾野に位置する宮城や天満沢には多くの古墳が築造されている。穂高古墳群は県内有数の古墳群で、その数100基を数えるが、その中で最も多い36基をかかえる穂高B群(天満沢・小岩嶽)は正に戌の方角である。古墳群の築造時期も6世紀後半～7世紀後半と、天武の生きた時代と合致する。

穂高神社を中心とした三合火局の方角(寅・午・戌)にはそれぞれ火気にかかわる山や神社、地名、古墳などが配され、火徳の反映を見ることはできる。しかしこうした方位観は何百年もかけて徐々に完成された観を認めない。平安時代以降の発生と想定される鬼門思想の影響や何より恒久の都「平安京」からの影響も無視できないのである。

<平安京と鬼門>

平安京の三合について研究した曾我とも子氏によると第40代の天武天皇から数えて10代目、第50代の桓武天皇も火徳の王であり、平安京にも大極殿を中心とした三合火局の構造が見られるという。「平安京の背後には比叡山(東北)と愛宕山(西北)という2つの山がある。比叡山は平安京の東北に位置し鬼門守護としての延暦寺や日吉大社が置かれている。愛宕山には天皇の三種の神器とされる霊剣を鑄造した神護寺があり、ともに神聖視されている山である。地図上で大極殿を中心に比叡山と愛宕山を通るような円を描くと南は横大路朱雀という名称の地を通る。すなわち愛宕山と比叡山、横大路朱雀の3地点を結ぶと巨大な三角形が形成され、その中に平安京がすっぽりと収まるのである。」

比叡山・愛宕山・横大路朱雀を穂高神社から見た方位に置き換えると名九鬼、有明山、三郷の住吉神社となる。3地点を結んだ逆三角形の中心に穂高神社、三角形の三辺上に古の川会神社、長峰山、満願寺が位置しているの



がわかる。「名九鬼」は八面大王「ギシキの磐屋」のある有明山の真東に位置し、結界であると同時に鬼門の守り、鬼を忌避する地名へと徐々に変化していったように思われる。「紅葉鬼人伝説」からは問答無用で打ち捨てられる鬼(物見岩の鬼賊)の哀しさだけが伝わってくる。平安時代中期以降鬼退治の説話が増えてくるのも鬼に対する見方が大きく変化した証である。地方にもそれは伝播した。

穂高神社周辺では平安時代以降も、時代の影響を受けながら何百年もかけて陰陽呪術が施されていったのであろう。明科廃寺や穂高古墳群の造られた古い時代の呪的世界を残しながら新たな思想を取り込んで変化・継承していったのである。天武天皇がどう関わったのかはわからないが、穂高神社をめぐる呪的世界は意外と奥が深く、綿密に練られた計算の末、施術されたような気がしてならない。穂高神社の造営は安曇氏のみならず大和政権との直接の繋がりの中で実行されたものではなかったか。その疑いはますます深まっている。

参考文献

- 「大和の原像---知られざる太陽の道」 小川光三 (大和書房)
- 「方位と選地の謎」 大河内 俊光 (新風書房)
- 「日本書紀 上」 宇治谷 孟 (講談社学術文庫)
- 「日本書紀 下」 宇治谷 孟 (講談社学術文庫)
- 「続日本紀 上」 宇治谷 孟 (講談社学術文庫)
- 「信濃古代史考」 大和 磐雄 (大和書房)
- 「天武天皇論2」 大和 磐雄 (大和書房)
- 「風土記」 吉野裕訳 (平凡社)
- 「卑弥呼」 富来 隆 (学生社)
- 「魏志倭人伝」 石原道博編訳 (岩波文庫)
- 「陰陽五行思想からみた日本の祭り」 吉野裕子 (弘文堂)
- 「陰陽五行思想における三合の考察」 曾我とも子 (岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要第35号)
- 「明科町誌」
- 「池田町誌」 歴史編

安曇平の古代から中世の遺跡立地

寺島俊郎

1 はじめに

令和3・4年度、貞享義民記念館において「三郷の記憶 I、II」と題して、安曇野市三郷地区の遺跡から出土した市や個人が所有する縄文時代から中世までの考古遺物を2回に分けて一堂に展示した。

展示によって、安曇平南部の遺跡の立地は、自然地形と水利を基に、時代ごとの生活基盤である食料調達や当時の政治背景、土木技術の進歩などの違いや特徴によってその立地が変化していく様子が改めて見えてきた。今回は奈良時代以降の安曇平南部の開発とその様子を大観してみたい。

2 安曇平南部の地形 (地図1)

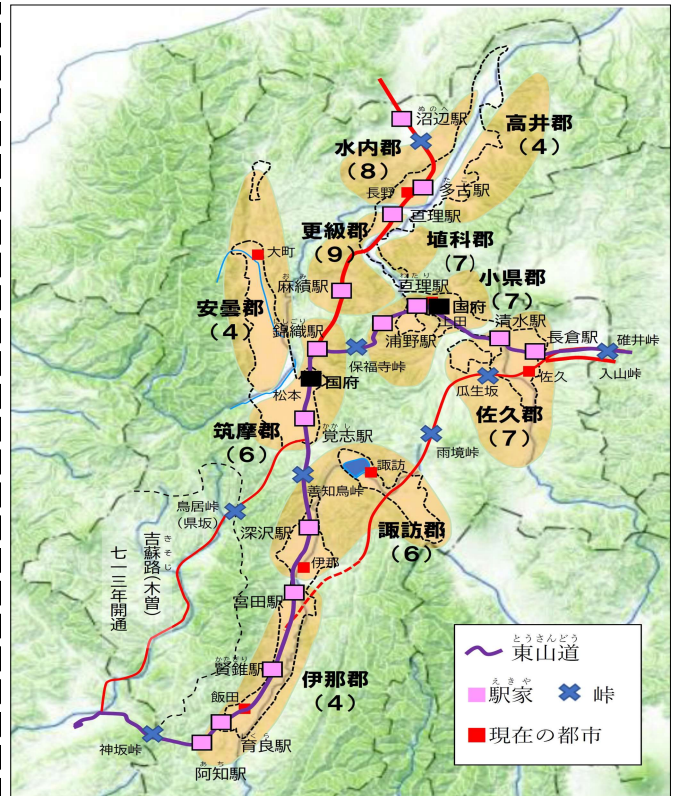
まず、安曇平南部の地形から見てみたい。

西山(飛騨山脈の前山)の裾野には南から古く梓川扇状地面にあたる段丘面の上野面がある。ここは山から流下する本神沢や尾入沢・穴沢川などによって浸食分断された台地状を成している。上野面の北には黒沢川扇状地が連続し、その北に烏川扇状地、中房川扇状地が重なり合っ

て続く。扇状地が重なり合う扇端部は緩やかな谷状地形となり、深沢や天満沢川下流部分が流れる。上野面の東にはこの面を梓川が浸食し、砂礫に覆われた平坦な丸田面が形成され、梓川・三郷・堀金・豊科まで広がる。上野面との境は10~15m位の段丘崖となり、烏川扇状地の下堀地区にもみられる。

その東の岩岡面は、梓川の現河床に続く堆積面で、丸田面を浸食した砂礫などに覆われた平坦面で、岩岡から豊科地区の平地部の大半に広がり、古くから洪水にさらされた面である。丸田面との境は段丘となっている。

北穂高地区を南流する高瀬川の両岸域と穂高川の東側は洪水地域である。



地図2 古代の信濃国の行政区分

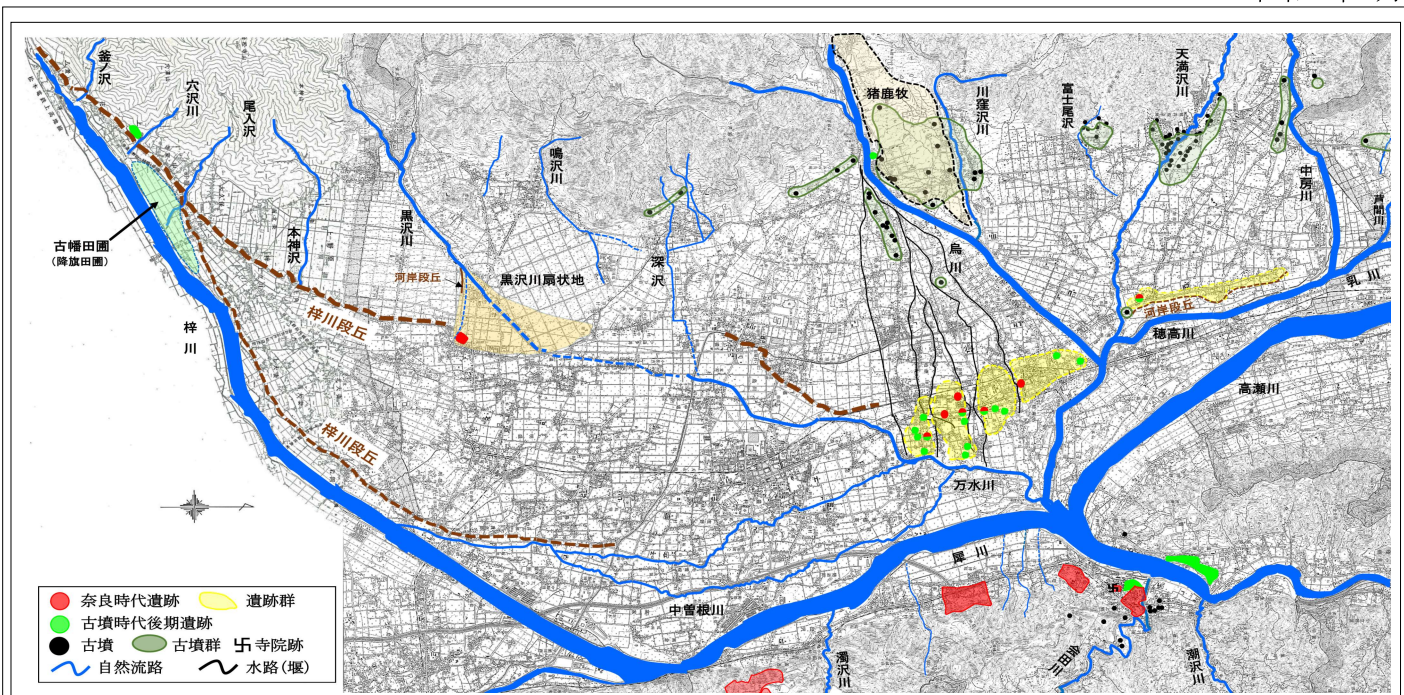
総じて安曇平南部の多くは上野面・丸田面、扇状地扇頂・扇中央部の水利に恵まれない地域と梓川(犀川)・高瀬川・穂高川の洪水域で、農耕に不向きな地域が多かった。

3 村の少ない古代の安曇郡 (地図2)

701年に制定された大宝律令によって地方行政区分が完成した。全国を五畿七道に分け、地方を約60国に分割し、国内は国一郡一里(郷)に分けられた。郡は50戸を単位とする里(郷)に分けられた。(自然地形の境界ではない)

地図1 安曇平南部の地形





地図3 古墳時代後期と奈良時代の遺跡

930年代に編纂された『和名類聚抄』では信濃国には10郡67郷が所在した。安曇郡には4郷(高家・八原・前科・村上)があるが、隣の筑摩郡や北の小さな埴科郡(千曲川右岸)に比べ、平地面積が広い割りに人口が少ない郡だったことがうかがえる。

この様子を遺跡の数や立地からみてみたい。
(*1戸の規模は10~100人程度と考えられている)

4 古墳時代の遺跡 (地図3)

古墳時代後期後半(6世紀後半から8世紀初頭)の遺跡を見ると100基余りの古墳が、西山山麓と東山(筑摩山地)山麓の2か所に大きく分布し、その多くは西山山麓に集中している。

西山山麓では北の松川村鼠穴付近から有明・牧・岩原・田多井へと築かれ、北の芦間川から中房川・天満沢川・富士尾沢川・川窪沢川・鳥川・深沢などの川沿いに分布しグループ化しているように見える。

これらの古墳を築いた人々の遺跡は、現在、鳥川扇状地の扇端部の穂高一矢原間の国道147号線辺りから東側一帯(遺跡群)に見つかっている。ここは湧水と鳥川の旧河道の小河川の水を利用した耕作地域を経済の基盤として成り立っていた集落である。ここに所在したいくつかの集落の有力者たちが上記のグループごとに分かれて古墳を築いたのではないかと考えられている。

しかし、古墳群の範囲から考えて北の中房川や天満沢川の古墳群は別の集落を想定するべきとする考えもある。確認は少ないが、中房川扇状地の扇端部の穂高川の河岸段丘面の縁辺(耳塚一古厩)の耳塚地区では古墳築造前の5世紀の土器が地中から発見されており、段丘下の低地(穂高川より標高の高い離水域)などを耕作地域とした集落の存在が想定されるが、発掘調査などが無いため、この地域一帯の地下の様子がはっきりしていないのが現状である。

東山山麓の明科地区には犀川右岸の河岸段丘面の会田川両側の山裾と山腹の2地域に古墳が分布している。また、犀川左岸の七貴地区にも古墳が1基存在する。生活域は同じ段丘面の古墳域から少し距離を隔てた場所に立地している。また、ここには明科廃寺が建立されている。その他には天満沢川下流、梓川上野面に遺跡が所在する。

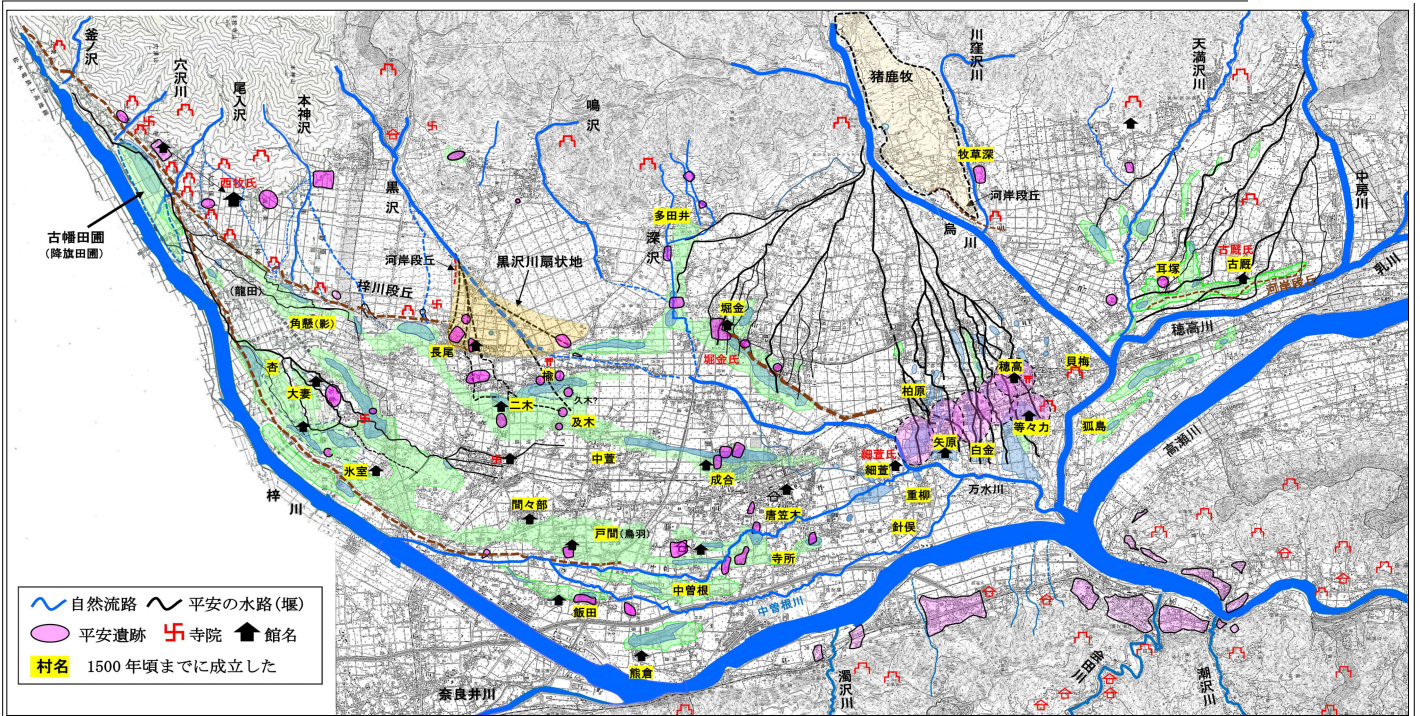
5 奈良時代の遺跡(地図3)

奈良時代の遺跡分布を地図3で見ると、古墳築造時期の集落跡とほぼ同じ地域に所在していることがわかる。このことから多少の村の拡大はあったとしても同じ地域で人々が生活していることがわかる。

大化の改新(645年)以降準備がされ制定された大宝律令(701年)によって、公地公民化による土地の国有化と、国民への納税(租・調・庸)の義務が課せられた。税の中心の租は、国から口分田(公地)を個々に均等に班給し、収穫の3%を稲で納め、死んだら田を返す、というものである。安曇平では従来経営されてきた水田が人々に班給されたことから、田の周辺に居住し、死後、田を返すため、水田開発をする必要もなかったものと考えられる。

そして、口分田の班給による人口増加などで口分田が不足するようになると、国家主導による耕地開発も追い付かず、百万町歩開墾計画(722年)や三世一身法(723年)墾田永年私財法(743年)などの制定により、個人の開墾地の所有が認められた。これを機に公地公民が崩れ始め、全国で開発が盛んになっていく。

松本地域では、奈良井川や田川、鎖川左岸沿いの沖積地の大開発が始まり、大きな遺跡が登場する。しかし、安曇平南部では開発はほとんど行われなかったものと思われるが、2で前述した穂高川の河岸段丘面は松本の地形より規模は小さいが近似している。



地図4 平安時代と中世の館跡・山城と集落(1500年頃以前)

6 平安時代の遺跡 (地図4)

地図4から平安時代(9世紀中頃)になるとこの地域でも遺跡数と地域が一気に増加・拡大する。黒沢川扇状地扇端部(上長尾・二木・楡)、烏川扇状地扇端部南(田多井・田尻・上堀・下堀)、梓川の丸田面(大妻)、梓川旧河道の中曽根川流域など、西山山麓、東山の犀川右岸段丘面など安曇平南部全域に遺跡が展開するようになる。

共通点は、自然河川から離れた沖積地(耕土が厚い場所)や段丘面への導水と梓川の洪水域などの開発であろう。これは、灌漑や堤防工事技術の進歩が背景にあると考えられそうである。

平安時代のはじめには、口分田の班給が行われなくなり、税の租(粃)も減収になっていく。信濃では都へ輸送する米など重くかさばる物に代えて、軽量の調・庸の布の貢献が盛んになり、全国でも有数の麻布の貢献量が多い国になっていったと考えられている。

そのために、麻(大麻・苧麻)を栽培する畑地の開墾が盛んになる。麻は調・庸の布生産ばかりでなく、中男作物(税)としての麻子(実)の貢納4ヶ国にも制定されていることから、水の少ない安曇平では水田以上に麻など

を栽培する畑地が多く開発されたと想像される。

そして、時代は下がるが1500年頃までに成立している村や中世の館跡の位置は平安時代の遺跡と同じ場所か隣接地に成立していることから、現在の安曇平の景観となる開発は平安時代に始まったことがわかった。繰り返しになるが、有明地区一帯の有力豪族の古厩氏の経済基盤となる館跡周辺や中房川の支流跡の耕土の厚い地域にも平安時代の遺跡が眠っていると思われる。扇状地や遠い離水地への安定した導水が行われるようになるのは中世後半から近世初頭と近現代の堰開発の時代を待たなくてはならない。

参考文献

- 『長野県史 通史編第1巻』『松本市史』『穂高町誌』『梓川村誌』『穂高の宝』
- 「素描 古代末期から中世の安曇野」原明芳
- 「安曇郡の古代を考える」原明芳 他

そんな折に明科公民館で、今号に寄稿いただいた矢花和成さんの講座を受講しました。明科はフォッサマグナの海底の地層からなり、北アルプスは更に古い恐竜の時代の地層なのだ学びました。

ある日突然人類が現れ、そこから歴史が始まったのではなく、大地にも形成される歴史があり、学問では歴史と地学に分けられていたとしても繋がっている流れだを意識するようになりました。大地の上に織りなされた悠久の時に思いを馳せながら、地形や地質にも興味を広げて学びたいと楽しみが広がった瞬間でした。

編集後記
加藏友美

歴史の始まりをイメージする時、私が思い浮かべるのは、猪を追いかけて狩りをし、土器を作って煮炊きする家族です。さて、このイメージはどこで生まれたのだろうと本棚を辿ってみると、小学生の頃に読んだ、まんが日本の歴史第1巻の冒頭でした。

長峰山頂から安曇野を一望しながら、ふと考えました。常念岳はいつから今の形なのだろうか？もつと時代を遡れば、もしかしたらシガマツコウジラが安曇野を泳ぎ、日本海から太平洋まで回遊していたのかもしれない…と空想は広がっていききました。